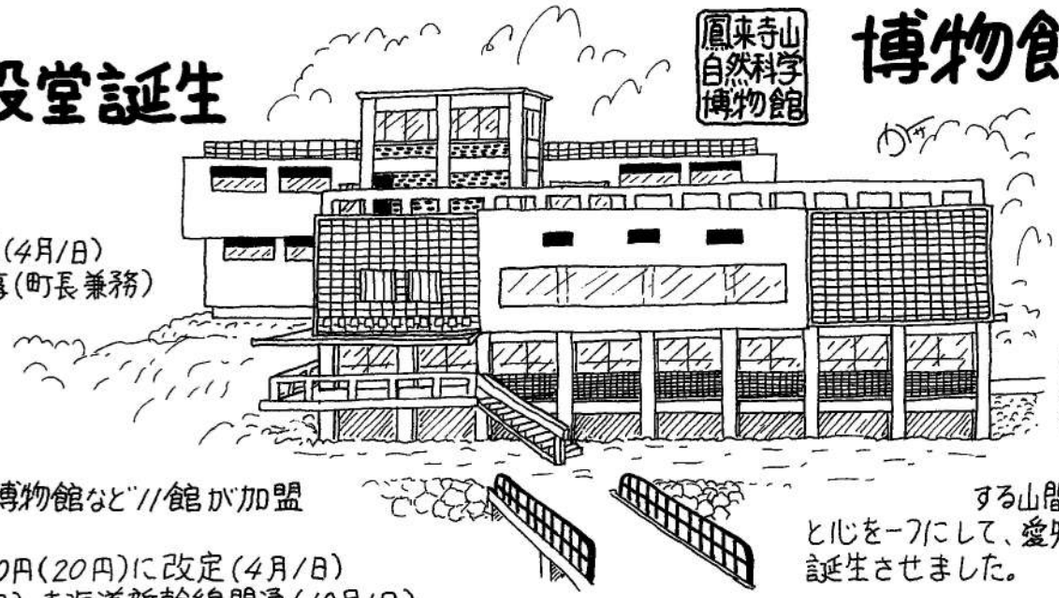
博物館物語 ―その2― 自然科学の殿堂誕生

鳳来寺山自然科学博物館
博物館ザッ記 No.37 2023.Ⅱ



昭和38年（1963）
展示作業（1月15日～4月15日）
国内初の二重展示方式を導入
博物館条例制定（4月1日）
初代館長：加藤淳（町長兼務）
開館式（4月25日）
一般公開（4月26日）
入館料
30円（大人・高校生）
25円（同・団体20名～）
20円（小・中学生）
15円（同・団体20名～）
休館日
12月28日～1月1日
1月から月曜休館
愛知県地区博物館連絡協議会結成、鳳来寺山自然科学博物館など11館が加盟

開館式では会場の上空に飛来したヘリコプターから祝辞の入った筒が投下され、式典が開式しました。
物心両面で絶大な功労があった丸山喜兵衛氏へは感謝状が授与されました。同年11月には、第1号となる名誉町民章が贈られました。
自然を愛し、文化を大切にする山間の小さな町が、研究者と町民と心を一つにして、愛知県初の自然科学博物館を誕生させました。

昭和39年（1964）
入館料：大人50円（団体40円）、中学生40円（30円）、小学生30円（20円）に改定（4月1日）
愛知県地区博物館連絡協議会総会を当館で開催（7月3日）、東海道新幹線開通（10月1日）
年間無休開館（年末年始は休館）
東京オリンピック開幕（10月10日）

展示は新井重三博士が、昭和33年に「博物館研究」で発表した二重展示方式をとり入れました。第1展示室を一般見学者向けの生態展示とし、第2展示室は専門的な分類展示とするもので、全国初の試みで注目を集めました。館の背後には鳳来寺山がひかえ、山そのものが生きた博物館とも言える立地です。
さらに町内には、国や県の名勝・天然記念物が多数あり、自然の宝庫です。
めぐまれた自然を調査研究し、地方文化の興隆を図ること、自然科学の振興に寄与すること、観光教育施設として町の発展の礎石とすることなど、大きな目標をかかげ一歩を踏み出しました。

昭和40年（1965）
コノハズクが愛知県の鳥となる（5月10日）
地質園完成（12月9日）

鳳友会メンバー

昭和41年（1966）
「館報第1号」発行（4月1日）
「指導の手引」発行（8月30日）

昭和42年（1967）
硯石採石場で足跡化石発見（3月7日）
愛知県地区博物館連絡協議会を愛知県博物館協会に改称（3月28日）

昭和43年（1968）
「博物館資料分類目録第1号」発行（3月1日）、「自然観察・採集案内Ⅰ」発行（9月15日）
愛知県博物館協会理事館となる（5月30日）、田口鉄道廃線（8月31日）

「東三河の地質と鉱物の会」の主要メンバーで構成された「鳳友会」は展示内容研究委員として、標本の収集と展示を短期日で完成させました。開館後は学術委員として、館の学術面を引きつづき支えてくれることになりました。

昭和44年（1969）
生態展示・分類展示改善（6月4日～7月2日）
丸山喜兵衛頌徳碑除幕式（9月7日）、「自然観察・採集案内Ⅱ」発行（12月25日）

昭和45年（1970）
愛知県博物館協会理事館となる（4月1日）、門谷小学校閉校（3月30日）
愛知県民の森開所（7月17日）、大阪で万国博覧会開幕（3月14日）

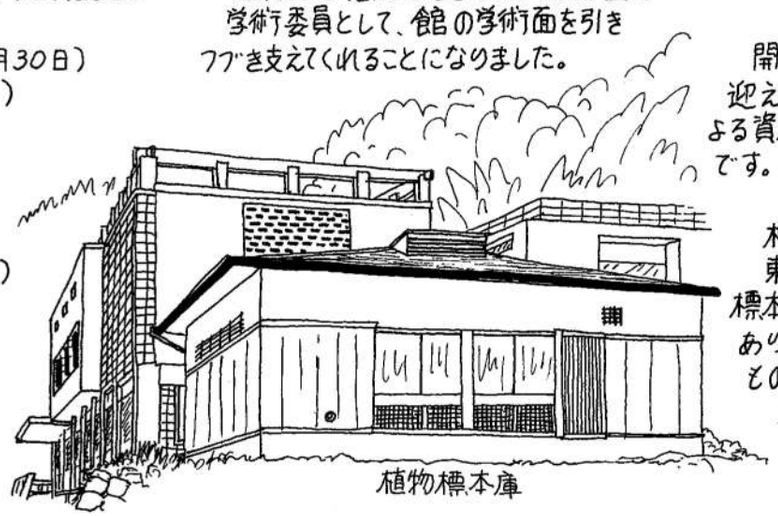
田口鉄道自然科学博物館から引きついだ資料を含め開館当時2,300点ほどであった資料は、10周年を迎えた頃には6,000点余となりました。調査研究による資料の収集、学術委員の先生方からの寄贈によるものです。

昭和46年（1971）
鳳来寺山パークウェイ開通（8月14日）
（全長7.7km）

昭和47年（1972）
入館料：大人100円（団体80円）、小中学生50円（30円）に改定（4月1日）
札幌冬季オリンピック開幕（2月3日）、沖縄が日本復帰（5月15日）
第18回日本野鳥の会全国大会を鳳来寺山で開催（6月3日・4日）

昭和47年には、学術委員の鳥居喜一先生から植物標本の寄贈の申し出がありました。歯科医のかたわら東三河を徹底して踏査し、収集した3万点を超える標本です。新発見の植物や分布上の新発見が数多くあり、国立科学博物館や東大、京大に納められたものと同じ貴重な標本が多数含まれていました。
東三河フロラの証拠としてかけがえのないもので、県下最大のコレクションを収蔵する植物標本庫が昭和48年に完成しました。

昭和48年（1973）
開館10周年記念誌「鳳来寺山 -自然と文化-」発行（4月25日）
10周年記念式典開催（4月29日）
植物標本庫完成（木造平屋建94.52m²）（9月22日）



植物標本庫